バイロンのリベラリズム
——ラダイト運動をめぐる葛藤を中心に——

田 原 光 広

1816年28歳でイギリスを離れるまで貴族院のメンバーとしてリベラリズム擁護の論陣を張り、イタリアにあっては、オーストリアの支配からの解放とイタリア統一を願う秘密結社 Carbonari 党の活動に深く関与し、最後には、トルコの圧制からの独立を求めて、全財産と生命をギリシャ独立運動のために捧げた詩人 Byron。このような、自由を希求しそれに殉じた詩人像が、いわゆる Byronism と呼ばれる Byron 人気に大きく貢献したことは論を俟たない。しかしながら、彼の政治的立場は、リベラリズムをその基調としながらも、現実には、さまざまな葛藤を孕んでいる。本論では、まず、詩人の政治的リベラリズムの変遷の跡を辿り、彼の葛藤がいかなるものであったのかを明らかにした上で、彼のリベラリズムの立場が、政治的であると同時に、気質・体質に深く根差した生理的リベラリズムとでも呼ぶべきものとどのように関わっていたのかを、詩行を参照しつつ解明してみたい。

I

1812年2月27日（24歳）、貴族院での初めての演説の主題に Byron が選んだのは、1811年頃から Nottingham を中心とするイングランドの中部・北部地方で広がりつつあった Luddites 運動を取り締まるための法案 Frame-work Bill であった[1]。彼は、この中で、人道主義の立場から、「改良された機械」（improved frames）を大幅に採用することによって、

職を失い、路頭に迷い、悲惨な生活を強いられている職人達に深い共感を示した。改良された機械の持主である少数者を経済的に豊かにするために、多くの勤勉なる職工達が犠牲にされている現状を告発し、自分達のぎりぎりの生活と生命を守るために機械破壊の暴挙に出ざるを得なかった彼らを、「死刑」という刑罰で押さえ込もうとする法案に異を唱えたのである。

彼の主張は、貴族院での初めての演説としては過激なものであり、貴族院よりも庶民院の改革派に歓迎された。しかしながら、少し詳しく、彼の演説を調べてみる時、彼が、エスタブリッシュメントに対して、ある種の配慮を見せていることが理解できる。例えば、次の引用箇所では、

> The rejected workmen, in the blindness of their ignorance, instead of rejoicing at these improvements in arts so benefical to mankind, conceived themselves to be sacrificed to improvements in mechanism. In the foolishness of their hearts they imagined that the maintenance and well-doing of the industrious poor were objects of greater consequence than the enrichment of a few individuals by any improvement in the implements of trade, which threw the workmen out of employment, and rendered the labourer unworthy of his hire(2).

「機械装置の改良」(improvements in mechanism) そのものは、人類にとって有益なものであるという前提に一片の疑念を差し挟もうともしてはいない。また、階級意識を背景に使っていると思われる "in the blindness of their ignorance" とか "in the foolishness of their hearts" といった言い回しや、別の箇所で使われている "mob" という単語には、治める側と治められる側を明確に区別した上で、自分が貴族院のメンバーと同じ側に立つ者として、憐むべき職工達に慈愛の手を差し伸べる必要性を訴えているのだという、聴衆である貴族議員に対する、ある種の配慮が

読み取れる。それは、貴族階級が労働者階級に対して憐れみをもってほどこす「共感」の域を出るものでは決してない。

そのような配慮は、議会演説の2日前にあたる2月25日付の Holland 男爵宛の手紙にも窺える[3]。機械技術の改良・進歩は人類にとって有益なものではあるが、ほんの一部の機械所有者達の金儲けのために、地域共同体にとってより重要な勤勉なる庶民が「機械装置の改良」(improvements in Mechanism) の犠牲になることが許されてはならないと、演説原稿の一部が繰り返された後、Frame-work Bill の危険性について、「現法案は、彼ら（職工達）を現実の反乱へと駆り立てるという結果をもたらす恐れがあります」(The effect of ye present bill would be to drive them into actual rebellion.) と述べている。ここにも、治める側に立つ者として、治められる側の反乱を回避する方策を考慮する立場が示唆されているのは明らかであろう。さらに、手紙の末尾の方では、次のように書き添えているのである。

> I believe your Lordship does not coincide with me entirely on this subject, & most cheerfully & sincerely shall I submit to your superior judgment & experience, & take some other line of argument against ye. bill, or be silent altogether, should you deem it more adviseable[4].

初めての演説を控え、政界への新参者として、ホイッグ党の指導者のひとりであるHolland男爵に対する社交辞令的な面があるのも事実ではあるが、演説内容の過激性と考え併せる時、ある種の配慮は尚一層際立つ。

しかしながら、貴族院の文体とも呼ぶべきものに抑制をかけられた若き Byron のむき出しの理想主義は出口を求めずにはいられない。同年3月2日に、匿名で *Morning Chronicle* 誌に発表された Byron 作の 'An Ode to the Framers of the Frame Bill' の詩には、数日前の議会演説にあのような配慮を持ち込んだ自分を嘲るかのようなアイロニーの辛辣さが

ほとばしる[5]。

... if we can hang them for breaking a bobbin,
'T will save all the Government's money and meat:
Men are more easily made than machinery—
Stockings fetch better prices than lives—[6]
…もし、かれらを糸巻き機を壊したかどで絞首刑にできるなら
政府の金も肉も大助かり
所詮、人間なんて機械より手軽に作られ
靴下が人間の生命よりいい値で売れる

このような過激な詩行を貴族議員の Byron が、ナポレオン戦争の最中、イギリス国内の引き締め政策が強化されつつある時代状況の中で、匿名で発表せざるを得なかったのは当然のことであった。ただ、ここで興味深いのは、「ノブレス・オブリージュ」に代表される支配する側の論理と、支配する側の偽善と圧政を告発する側の論理との間で揺れ動く Byron のアンビバレントな感情である。この種のアンビバレンスはこの詩人の生涯に絶えず付きまとった感情であったように思われる。

II

3 回の議会演説を行ったものの、「議会の虚礼」(parliamentary mummeries)[7] にうんざりしたこともあり、Byron は政界への興味を次第に失っていった。しかし、妻との別居をめぐるスキャンダルに巻き込まれ、社交界からの厳しい非難の的となり、ヨーロッパ大陸に向けイギリスを離れた詩人の心中には、ふつふつと沸き上がってくる本国のエスタブリッシュメントへの敵意があった。この感情が、ホイッグ党のリベラリズムの伝統から大きく踏み込んだ急進的共和主義へと詩人を向かわせることに

なる。

イギリスを離れて約８ヵ月を経た1816年12月14日、Byron はイタリアのヴェニスから、Thomas Moore 宛の手紙に、機械破壊の職工たち（ラダイト）のための詩を同封した[8]。

As the Liberty lads o'er the sea
Bought their freedom, and cheaply, with blood.
So we, boys, we
Will *die* fighting, or *live* free,
And down with all kings but King Ludd !
When the web that we weave is complete,
And the shuttle exchanged for the sword,
We will fling the winding-sheet
O'er the despot at our feet,
And dye it deep in the gore he has pour'd.

Though black as his heart its hue,
Since his veins are corrupted to mud,
Yet this is the dew
Which the tree shall renew
Of Liberty planted by Ludd !

この詩には、いつ帰るあてもなく国を遠く離れた者の持つ気楽さも手伝って、フランス革命を引き合いに出しながら、ラダイト運動の創設者として名を残す Ludd に King の称号を与えた上で、それ以外のあらゆる王の打破をいささかヒステリックに叫ぶのである。恨みの感情とは、たとえ自分に向けられた非難に何ほどかの正当性があったとしても、非難の刃の傷みに報いようとする感情なのであろう。自分たちが織り上げた「経帷子」

(winding-sheet) を足下の専制君主に投げつけ、それを彼の流す血のりで染めようと言うのである。しかも、その血のりは、堕落してどす黒くなっており、それこそ Ludd によって植えられた「自由の樹」(the tree.../Of Liberty) が甦らせる「露」(dew) なのである、と締め括る。この詩は 'Song for the Luddites' と一般に呼ばれているが、実際にはラダイト達の自由を願う詩というよりも、自らの恨みをぶつけた詩に他ならない。そのことは、先に引用した 'An Ode to the Framers of the Frame Bill' という匿名で発表された詩において、職工達は「彼ら」(they) という三人称複数で表わされ、作者 Byron は痛罵の相手である貴族達とともに「われわれ」(We) の中に組み入れられていたのに比べ、この詩 'Song for the Luddites' において、作者 Byron はラダイトとともに二人称複数「われわれ」の中に組み込まれていることから容易に想像できる。ラダイトの声を借りて、自らが属しているはずの支配階級に向かって恨みをぶつける形式を取っている。先に用いた言い方を使うならば、治める側から治められる側への視点の変化が生じているのである。

Ⅲ

イギリスから遠く離れたイタリアに住み、そこでの活動に巻き込まれる中で、イギリスのエスタブリッシュメントに対する Byron の恨みの感情は薄れてゆき、彼の政治的リベラリズムの立場は、生来の貴族としての誇りに支えられながら、ホイッグの伝統的リベラリズムへと回帰してゆく。それは、遠く隔たった所から祖国イギリスを見ているがゆえに、ナポレオン戦争時、対フランスに対する危機意識によって抑制されていた国内の諸問題が、戦後、階級間の熾烈な対立の問題へと収束してゆくイギリスの政治の現実を間接的にしか知り得ないという事情が大きく影響していたのかもしれない。

1820年 4 月22日、親友 Hobhouse 宛の手紙には、急進的改革派の

Orator Hunt や Cobbett に対する憤りの感情が露骨に表わされ、彼らのことを "scoundrels" とか "ruffians" とか呼び、そこに、'Song for the Luddites' の作者の面影を見つけるのは難しい[9]。とりわけ、1819年8月16日、Manchester の St. Peter's Field で起こった Manchester Massacre とも Peterloo Massacre とも呼ばれる暴動事件の首謀者 Henry Hunt に対する Byron の非難は厳しい。この事件は、選挙法改正と穀物法撤廃を叫んで集まった5万人から8万人もの群衆が、首謀者 Hunt の逮捕に際し暴徒と化し、騎馬兵が彼らに攻撃を加え、11人が死亡し数百人が負傷した事件であり、当時、民衆に対する当局の抑圧のシンボルとされた事件であった。この頃の Byron にとって、Hunt は、社会の秩序の破壊へ群衆を扇動する過激派以外の何者でもなく、"I do not think the man who would overthrow all laws should have the benefit of any" と断じ、さらに次のように言い放つのである。

> I think also that if the Manchester Yeomanry had cut down Hunt only--they would have done their duty—as it was—they committed murder both in what they did—and what they did not do, —in butchering the weak instead of piercing the wicked, in assailing the seduced instead of the seducer—[10]
>
> マンチェスターの志願兵はひとりハントのみを切り倒しておれば、彼等は自らの義務を果たしたことになっていたであろうに、実際には、悪人を突き刺す代わりに弱者に切りつけ、そそのかしたものを攻撃する代わりにそそのかされたものを攻撃し、実行したことと実行しなかったことの両面において、殺人の罪を犯したのだ。

また、同じ手紙の中で、"radical" という単語は、彼がイギリスを離れた1816年まで、政治用語として使われてはいなかったと打ち明け、変わりつつある政治状況が見えないもどかしさと相俟って、詩人自身は、思い出の

中のイギリス、伝統の中のイギリスへと尚一層、埋没してゆこうとしているように思われる。

さらに、1821年10月12日付けの同じく Hobhouse 宛の手紙では[11]、祖国イギリスで将来革命が起こり君主政体が打破され、共和国となる日が来ることは避け難いであろうと予測した上で、「私はそれを残念に思う」(I am sorry for it) と結んでいる。ここに見られる、イギリスにおいて革命は避けられないという認識、および滅びゆく階級への押さえ難き哀惜の情は、同年1月13日の日記にも "the Powers mean to war with the peoples.... —they will be beaten in the end. The king-times are fast finishing. There will be blood shed like water, and tears like mist; but the peoples will conquer in the end. I shall not live to see it, but I forsee it." という類似の表現の中にも読み取れる[12]。また、同じ1821年に創作された劇詩 *Sardanapalus* の終幕において、臣下の反乱にあって滅亡するアッシリア帝国最後の王 Sardanapalus が燃え盛る炎に身を投げる場面の描き方にも、同種の心情の反響を聞き取ることが可能である[13]。

イギリスの急進派 (radicals) に対する憎悪にも似た感情は、民主主義 (democracy) に関するByronの見解にも次のような形で手紙の中に表明されているが、これも彼の伝統への回帰の延長線上で理解すべきであろう。

And yet it is difficult to say whether hereditary right—or popular choice produce the worse Sovereigns—The Roman Consuls make a goodly show—but then they only reigned for *a year*— & were under a sort of personal obligation to distinguish themselves. —It is still more difficult to say which form of Government is the *worst*—all are so bad. —As for democracy it is the worst of the whole—*for what is (in fact)* democracy an Aristocracy of Blackguards.[14]

世襲に基づく統治であれ選挙に基づく統治であれ、如何なる政治形態であれ、統治されることを望みはしないという詩人の思いを“worse”という比較級に込めた後、すべての政治形態の中で民主主義こそ最悪のものであり、民主主義とは「ならず者による貴族政治」(Aristocracy of Blackguards) に他ならないと断定している。この言葉には、貴族階級に属する者が自らの階級を保身のため擁護するといったレベルを超越した衝撃力が感じられる。

Ⅳ

1819年頃から、イギリスの政治を眺望する Byron の視線が、ホイッグ的リベラリズムの色合いを帯び、時にはそれ以上に保守的な色合いを帯びてきたことについては上述した通りである。しかし、このことをもって、イタリアに住み着いた Byron が体制順応型のリベラリズムの信奉者に変貌したなどと判断するのはもちろん間違っており、現実には、イタリアの統一とオーストリアの圧制からの解放を画する秘密結社 Carbonari 党の運動にますます積極的に関与するようになり、自宅を秘密結社の武器庫に提供したりして絶えず当局の監視を受けるような状態であった。ここでわれわれは、Byron のリベラリズムを二つの側面から検討する必要がある。ひとつは、専制君主による国内の圧政からの解放と自由を求めるリベラリズムであり、もうひとつは、外国からの支配・束縛からの解放と独立と自由を求めるリベラリズムである。イタリアにあって、Carbonari 党と行動を共にし、オーストリアの圧制からの解放とイタリアの統一を求めて戦う Byron にとって、政治的リベラリズムの立場は、かなり素朴な形で、彼の理想主義と重なり合うことができたであろうと推測される。もちろん、その場合にも、Byron が念頭に置いていたのは、貴族主導の独立運動であったことは、この時期に書かれたヴェニスの共和国に題材をとった2本の劇詩 *Marino Faliero* と *The Two Foscari* からも容易に想像できる。ま

た、ギリシャの独立運動へ参加するに際しても、イタリアの場合と同様、トルコという外国の圧制からの解放と独立に自らを捧げる行為は、彼の政治的リベラリズムが彼の理想主義と重なり合い、ひとつの大いなる大義として、少なくとも、彼の心の中では、不動のものとして存在しえたはずである。もちろん、ギリシャ独立運動に際しても、金銭をめぐるトラブルや目の前のギリシャ人への幻滅など、さまざまな困難な状況は実在した。しかし、それらの困難はトルコの圧制からの解放と独立という不動の大義の実現の前に横たわる障害に過ぎなかったと言える。

ところが、イギリスにおいて、Byron の政治的リベラリズムの理念は、専制君主の圧政からの解放と自由という形では最早存在し得なかった。他国に先駆けて、いち早く産業革命を成し遂げつつあったイギリスにあって、圧政と自由の対立関係は、国王と貴族を中心とする社会階層との間にではなく、貴族達によって“mob”と呼ばれた一般大衆と貴族をはじめとする支配層との間で先鋭化しつつあったと言うべきであろう。選挙法改正をめぐる政治運動の流れは社会における階層間の対立関係の変化を予告するものであった。そして、“mob”と呼ばれた一般大衆の運動が、いわゆる政治的 radicals によって扇動されながら激化するにつれ、ホイッグの伝統的リベラリズムは、もはや、圧政からの解放と自由を希求する方向にではなく、トーリーとともに、“mob”に対して、圧制を加える側へと移っていったと見るべきであろう。イギリスのそのような政治状況の真只中で、国会議員となった親友の Hobhouse が時に radicals 達と行動を共にした時、Byron は冷ややかな言葉を投げ掛けた。けれども、ある意味で、Hobhouse は、真のリベラリズムを信奉する政治家として誠実に行動しようとしていたのだと言えるのかもしれない。ただ、そのリベラリズムは、イギリス国内に限定して言うならば、Byron が貴族政治家として拠り所にしようとしていたリベラリズムとは本質的に異なっていたのである。

V

では、Byron が希求し続けたリベラリズムというものは、単に政治的な枠組の中で理解し得るものだったのであろうか。確かに、36年の生涯を一瞥するだけでも、ギリシャ独立運動への挺身をその頂点として、政治的色彩にいろどられている。そして、それには、ヨーロッパ的規模でフランス革命からナポレオン戦争へと到る時代も、政治的に大きな影響を詩人に与えたに違いない。しかしながら、圧政からの解放を志向する政治的リベラリズムの立場は、Byron という詩人の場合、とりわけ、我が身を抑圧し束縛し拘束するものから我が身を解き放ちたいという極めて個人的な欲求と深く結び付いているように思われてならない。*Don Juan* 第15巻の第22スタンザから第23スタンザの詩行を引用しながら、Byron の共和主義は "political conviction" から出ているというよりも "rebellious temperament" に由来しているとの Andrew Rutherford の指摘は、詩人の政治的立場を「極めて個人的な欲求」との関係で説明していて興味深い[15]。この "temperament" という単語の意味を、*COD* は "individual character of one's physical constitution permanently affecting the manner of acting, feeling, and thinking" と説明している。つまり、訳語としてしばしば使われる「気質」という日本語よりも、肉体的な側面をも併せ持った単語であることがわかる。その意味で、「気質」と「体質」の両義のニュアンスを併せ持つ「生理」という訳語を本論では用いたい。というのも、後述するように、Byron の "temperament" が彼自身の肉体の影響を決定的に受けているからである。この詩人の場合、"temperament"（生理）という限りなく個人的な言葉が、すでに彼の世界観の全てを規定してしまっている。

Byron の政治的リベラリズムの姿勢が、深層において、彼の「生理」と密接に繋がっているとするならば、その「生理」の基本構造を決定づけたものは何だったのであろうか。その答えを求めて、詩のイメージに着目

してみたい。散文による説明文では明らかにされ得ない、詩人自身さえ気付いていない無意識・潜在意識の実相が、詩のイメージの形を借りて、個別の詩作品の枠を越え表出することがあることをわれわれは知っている。

ほぼ5年の歳月を隔てて1816年に書き継がれることとなった *Childe Harold's Pilgrimage* 第Ⅲ巻の第15スタンザは、祖国イギリスを離れ、再びヨーロッパ遍歴の旅に出る主人公 Harold の心境を鳥のイメージに喩えたものである。

But in Man's dwellings he became a thing
Restless and worn, and stern and wearisome,
Drooped as a wild-born falcon with clipt wing,
To whom the boundless air alone were home:
Then came his fit again, which to o'ercome,
As eagerly the barred-up bird will beat
His breast and beak against his wiry dome
Till the blood tinge his plumage—so the heat
Of his impeded Soul would through his bosom eat.(16)

だが、人の住処に在りて、彼は
落ち着きなく疲れ果て、気難しく気怠き存在となり、
ただ限りなき大空のみを住処としていた野性の隼が、
恰も、その翼を切り取られた如くに打ち萎れる。
されど、かかる時、彼の激情再び目覚め、超克せんとして、
さも、閉じ込められし鳥が、胸と嘴を懸命に鳥籠にぶつけ、
遂には、羽毛を血に染めてしまうが如くに。
かくして、囚われし魂の熱情や、その胸を食い破らん。

「限りなき大空」(boundless air) を住処としていた「野性の隼」(wild-born falcon) が翼を切り取られて、針金状のもので編まれた鳥籠の中に

閉じ込められ、それでも、鳥籠に胸と嘴をぶつけてもがき、その羽毛を血に染める。このイメージは、無限の空間を自由に飛んでいた鳥が、狭い空間に無理矢理に押し込められ、自由を奪われ、それでも、外に飛び出そうともがいているイメージへと一般化できよう。

これに類するイメージは、*The Age of Bronze* の中にも用いられており、敗北したナポレオンが、「狭い鳥籠」(narrow cage) に押し込められた「気高き熱情」(lofty rage) を持つ「鷲」(eagle) に喩えられている[17]。また、同じ作品の87行と88行では、死んだナポレオンを、「足枷をはめられた鷲」(fettered Eagle) が「鎖」(chain) を断ち切って、「より高い世界」(higher Worlds) を我が物とするイメージに準えている[18]。*The Prisoner of Chillon* の場合は、「地下牢」(prison) という狭い空間に閉じ込められ足枷 (fetters) をはめられながらも自由を希求する主人公 Bonnivard の精神のうつろいを描出する作品全体が、束縛・圧制からの解放を願う Byron の心象風景の投影であったと言えよう。これらのイメージを、Byron の作品に頻出する "fetter" (足枷) [全部で49回使用されている] のイメージと考え合わせる時、論者には、詩人の右足の先天的 clubfoot [医学的には彎足と呼ぶらしい] を矯正するために、幼き日の Byron の clubfoot に医師 Lavender がはめた "wooden machine" が、先ず、思い浮かぶのである。その矯正器具が幼き Byron にどれほどの激痛をもたらし続けたかについては、家庭教師 Dummer Rogers の証言を Marchand の *Byron: A Biography* が紹介している[19]。その器具は、内側に湾曲した右足の内側に耐えず力を加え続けることによって、clubfoot を矯正しようとするものであったらしい。その後、余りの激痛ゆえに、その矯正器は、放てきされ、専門医の診察に従って、鉄製の "instrument" が作られたりしたが、結局は、特製のブーツが考案され、利用されることとなった。

このような長期にわたった激痛を伴う clubfoot 矯正器具をめぐる幼児体験が、Byron の精神に影響を及ぼさなかったとは到底考えられない。もちろん、clubfoot そのものが彼の精神を生涯にわたって束縛し続ける

"fetter"（足枷）として作用したことも間違いない。しかしながら、それ以上に、Byron に内在する「生理的」リベラリズムの原型的イメージを、彼の clubfoot の矯正の中に見たいのである。

Ⅵ

議会での初めての演説に機械破壊者（framebreakers）を擁護する論陣を張った Byron についても、矯正器という "machine" なり "instrument" なり "frame" からの解放を願い、それを破壊したいと願ったであろう Byron と関連づけるのは、あまりにも強引であろうか。議会演説に先立って Holland 男爵に送られた手紙の末尾に追伸として、「私自身が半ば機械破壊者なのです」（half a framebreaker myself）[20]と書き加えた Byron の心に、clubfoot の矯正器のイメージは全く去来していなかったのであろうか。確かに、ここで使われている "framebreaker" という単語は表面的には社会秩序の "frame" を破壊する者と理解すべきであろう。だが、"frame" をめぐる幼児体験のトラウマを考慮に入れる時、"framebreaker" という単語に社会的意味と個人的意味の二重性を読み取ることは可能であるように思う。たとえ、それを、Byron 自身が意識していたにせよ、意識していなかったにせよ。否、むしろ、意識していないからこそ、幼児体験に根差すトラウマは、根深いと言えるのではあるまいか。

Byron の政治的リベラリズムと生理的リベラリズムの繋がりを具現化した表現の例として、最後に、Byron 自身が「ドイツにおいて、おそらくヨーロッパにおいて、最も偉大なる人物」（Greatest man of Germany—perhaps of Europe）[21]として尊敬した Goethe の *Faust* を提示したい。Faust と Helen の子供として第 2 部第 3 幕に登場する Euphorion が、Romanticism と Classicism の血を受け継ぐ者として象徴的に描かれ、Byron への追悼を込めて Goethe が描き出した登場人物で

あることは広く知られている[22]。次の一節は、誕生したばかりの Euphorion について語る合唱隊の台詞である。

Kräftig und zierlich aber zieht
Schon der Schalk die geschmeidigen
Doch elastischen Glieder
Listig heraus, die purpurne
Ängstlich drückende Schale
Lassend ruhig an seiner Statt.
Gleich dem fertigen Schmetterling
Der aus starrem Puppenzwang
Flügel entfaltend behendig schlüpft
Sonne durchstrahlten Äther kühn
Und mutwillig durchflatternd.[23]
ところが強くてかわいい赤ちゃんは、
しなやかだがぴちぴちした手足を
上手に抜き出して、
後生大事につつんでいた
真赤な産衣をもぬけの殻と
あとに残して行ってしまった。
それは、蛹が育って蝶になり、
窮屈な殻を脱ぎ
羽をひろげてすばやく脱け出し、
日光があふれる大気のなかへ、
思いきり気ままに舞って行くのと同じ。[24]

生まれたばかりの Euphorion は、「しなやかだがぴちぴちした手足」(geschmeidigen / Doch elastischen Glieder) を「真赤な産衣」という

「殻」(Schale) から取り出して、飛び立つのである。ちょうど、「蝶」(Schmetterling) が「窮屈な蛹の殻」(starrem Puppenzwang) を脱ぎ捨てて、「日光があふれる大気」(Sonne durchstrahlten Äther) の中へと舞い上がってゆくように。ここには、作者 Goethe が胸中に抱く Byron 像の本質が象徴的に描き込まれている。「日光あふれる大気」の自由を求めて、生まれたばかりの Euphorion が脱ぎ捨て、成長した「蝶」が脱ぎ捨ててゆく「窮屈な殻」は、三重の意味で理解されうる。一つは、上述したように、Classicism という文学上・芸術上の「殻」であり、一つは、イギリスという島国の持つ社会的「殻」であり、いま一つは、clubfoot という肉体的・生理的な「殻」である。一番目の「殻」は、Wordsworth に代表される Romanticism の文学よりも18世紀の Pope に代表される Classicism の文学の方に深い敬意を払い、自らの内なる Romanticism の文学に対して二律背反する感情を抱き続けた Byron の文学上の「殻」を表わす。二番目の「殻」は、新妻との別居をめぐるスキャンダルに巻き込まれ、社交界を中心とするイギリス社会から追い立てられるようにしてイギリスを離れた Byron にとっての、島国イギリスの固陋にして因習的な社会そのものを意味する。三番目の「殻」については、我田引水の読みを懸念する向きもあろうが、「しなやかだがぴちぴちした手足」という表現には Goethe の明白な意図が感じられる。足を束縛する「殻」、そしてその「殻」から抜け出し自由に飛び回ることを願う Euphorion、そして Byron。生来の clubfoot を矯正するために強制された "frame" や "machine" や "instrument" という足枷 (fetters) からの解放を願う一種の生理的リベラリズムは、社会という「殻」を破ろうとする政治的リベラリズムへと無理なく繋がってゆく。「殻」を "frame" に置き換えるならば、そこに、二種類の "framebreaker" が立ち現われるのである。

[註]

(1) Byron の議会演説は全部で 3 回。1812年 2 月27日、1812年 4 月21日、1813年 6 月 1

日。Rowland E. Prothero ed., *The Works of Lord Byron: Letters and Journals* Vol. II. (John Murray, 1898–1901), pp. 424–445 を参照。

(2) *Ibid.*, pp. 425–6.

(3) Letter to Lord Holland, February 25th, 1812. Leslie A. Marchand ed., *Byron's Letters and Journals* (John Murray, 1977), Vol. 2, p. 165-6.

(4) *Ibid.*, p. 166.

(5) *Morning Chronicle*, Monday, March 2, 1812. Ernest Hartley Coleridge ed., *The Works of Lord Byron: Poetry VII* (John Murray, 1898–1904), pp. 13–14.

(6) *Ibid.*, p. 14.

(7) Journal, November 14th, 1813. Marchand ed., *Byron's Letters and Journals*, Vol. 3, p. 206. 議会に対する失望感は、すでに同年3月26日付の Augusta Leig 宛の手紙にも見受けられる。*Ibid.*, p. 32.

(8) Letter to Thomas Moore, December 24th, 1816. *Ibid.*, Vol. 5, pp. 146–50.

(9) Letter to John Cam Hobhouse, April 22nd, 1820, *Ibid.*, Vol. 7, pp. 80–82.

(10) *Ibid.*, p. 81.

(11) Letter to John Cam Hobhouse, October 12th, 1821. *Ibid.*, Vol. 8, pp. 239–241.

(12) Ravenna Journal, January 13th, 1821. *Ibid.*, p. 26.

(13) 拙論 'Byron's Political Conflict in *Sardanapalus*'「英詩評論—特集　上杉文世教授中国文化賞受賞記念」(中国四国イギリス・ロマン派学会発行：1992年) 324－32頁を参照。

(14) Journal ("My Dictionaly"), May 1st, 1821, p. 107. Marchand ed., *Byron's Letters adn Journals*, Vol. 8, p. 107.

(15) Andrew Rutherford, *Byron: A Critical Study* (Stanford University Press, 1961), p. 192.

(16) E.H. Coleridge ed., *The Works of Lord Byron: Poetry* II, pp. 224–25.

(17) E.H. Coleridge ed., *The Works of Lord Byron: Poetry* V, p. 544.

(18) *Ibid.*, p. 547.

(19) Marchand, *Byron: A Biography* (New York; Alfred A. Knopf, 1957), Vol. I, p. 52.

(20) 註3を参照。

(21) Letter to John Murray, June 7th, 1820. Marchand ed., *Byron's Letters and Journals*, Vol. 7, p. 113. *Manfred* に好意あふれる批評を寄せてくれた Goethe に対する感謝と敬意は、*Sardanapalus* の献辞にも十分に窺える。

(22) Goethe の Byron に対する興味と評価の一端は、「ゲーテとの対話」において、イギリス文学関係ではその言及箇所が圧倒的に多く、Shakespeare を凌いでいることにも窺える。上杉文世「バイロン研究」(研究社、1978) 571頁を参照。

(23) テキストは、Johann Wolfgang Goethe, *Faust: Text* (Deutscher Klassiker Verlag; Frankfurt am Main, 1994) を使用。

(24) ゲーテ (井上正蔵訳)「ファウスト」(集英社、1980)、334頁。

Byron's Liberalism and his Conflict about Ludditism

Mitsuhiro TAHARA

This paper seeks to elucidate Byron's oscillations in his political liberalism and then show how deeply it was influenced by his trauma concerning his innate clubfoot by reference to his letters and journals, parliamentary speech and poetry.

In his first parliamentary speech at the age of 24 of the three in the House of Lords, Byron tried to vindicate the workmen of the Luddite movement against the Frame-work Bill, which was planned to impose capital punishment on the workmen who broke the machines of the factories for fear of their unemployment. It is true that his speech was sensational in the House of Lords in its progressiveness and was warmly supported by the members of the House of Commons. But, when examined carefully, Byron's progressive speech tells us of his discreet attention to the Establishment sticking to the ideal of noblesse oblige. This point can be more clearly reinforced by his deliberate words in his letter to Lord Holland just two days before his first parliamentary speech. It is possible to say that this political ambivalence can be found throughout his life.

Byron's political standpoint recurred to the Whig tradition as an English noble in Italy, although his liberalism became rather radical towards the English Establishment beyond the limits of the Whig tradition for a few years after driven out from England due to his

scandal. In about 1819 he began to express in his letters to his friends in England his strictures on the radical reformers such as Orator Hunt and William Cobbett. It may be partly because of lack of his immediate knowledge of the transforming political and social situation of England particularly since the end of the Napoleonic Wars. In other words, Byron became more and more conservative about the political situation in England and felt it more and more difficult to find the cause of his liberalism there as the polarization between the working class and the ruling class became deeper and deeper with the lapse of time. On the other hand, he more and more willingly pursued the cause of fighting Austrian oppression and unifying Italy, and of devoting himself to Greek independence from Turkey.